



重修真書太閤記  
二編  
七

13  
459  
17



持 18  
459  
17

重修真書

重修真書太閤記二編卷之十九

山路彈正降参請事

并 柴田木下爭論乃事

同政會印

高岡城中防禦難義不及びりるふより山路彈正降参を  
乞けまば織田殿諸將を集り評定あはれとて二方  
寄手乃諸將を召れれば柴田佐久間丹羽木下池田坂  
井森佐々前田林が輩責口ふら組下及び郎等少くも  
山路彈正弓折矢盡く降参乞わりの請小従之許さるべし  
を味方ふらまよき由はれりとの請小従之許さるべし

大開己二編卷之十九

や否諸將乃意見伐聞食るべき為召寄らるる所あり存  
 分と残さず言上仕るべき旨仰ありし時柴田進之出  
 山路がや條偽ふさひいまぐされども落城遠くは  
 存る処ふさの降参ふさも関神戸を勧めしとれを功  
 立ふとの義不聞えいし又以許さく責殺さんとの御説  
 ふさひさ味方を若干損むべく敵さく勇猛乃侍共伐  
 打殺はさんをも本意さ味方とさして忠と盡しめば  
 當國征伐の為ふ案内者あり先鋒あり味方ふ取て一臂  
 の力増ふ似たりこれさ関神戸降参ふ於て  
 も軍を出さず北伊勢四郡共ふ平均みは手ふ属せん  
 如何計り目出度ぬふいその上は本國のさも機遣はく

此ハ早くは凱陣いさる可然と存はと憚所をさくやけさ  
 織田殿ふも同心の体不見えは木下藤吉例よりを聲を  
 げはし柴田殿の意見一應を聞えはを某が思ふ處は山路  
 うや条全く偽さるべし関神戸の降参さく左様ふ心安く  
 中ふさるの殊ふ心得るは山路の故は山路の神戸と近親と  
 はは旗下の侍あり関を神戸乃總領家あり争で山路が  
 跡ふ付さかめくと一戦をせさしては手ふ属しはさ弾  
 正さし當るる危急伐のねんさりふ口り任せさ欺き只  
 味方と引退せんとの謀と存は實ふ降参仕るは山路先  
 陣頭ふ参上しはさ乃使ふ山路が書簡伐添て関神  
 戸へ遣し利害伐説さるべき筈あるふさの身を居城伐出

ぞして今宵中よひぢゆうに關神戸せきしんと調畧てうりやくしいたるまとち条信じゆうしんずるふ足あしさることにくい

高岡たかおかより神戸かみべままぐぐ廿餘町ふたじゆぢゆう神戸かみべより庄野しやのへ出龜山いづみやま伐

過まるり關せきありま乃な行程こうてい五里ごり小遠こゑんしまぐぐ六里りく小及せうおふ

地ちと一篇いっぺん乃な書牘しよかく小せう大だいをを決けつせんと誠まこととと聞きき

此城このしろままぐぐ小落去せうらくそ遠とほくく存ぞん片時ぺんじををややくく責破せきやり

勢せい小せうののりりくく神戸かみべ關せきをを責せととせせるるとと弓箭きうせんのの道立みちたて

く征伐せいばつ乃な本意ほんいと存ぞん以い早々ささはは人数にんず伐ばつ操出そうしゆしし城しろをを圍うま

せせいいととんんとと專せん一いつ小せうははとと進しんかかななれれがが柴田しばたととののれれがが意いり

應おぜぜぎぎははをを憤いらいりり木下きのした小向せうかうふふくく降くだるる伐助ばつすけくるるハ良將りやうしやう

乃な仁にありり若降わくかう叅さんをを許ゆるささらんんハ當國たうこく許ゆる多たのの城持じやうぢとも

一圖いちず小籠城せうろうじやうして切死きりじとわわののひ定ひぢやうままは味方あじかたををままとと多

く損しんぶぶるるとと勿論むつろんありり今山路いまやまぢをを許ゆるされれくく外ぐわい乃

城主じやうしゆととももの志しをを動うごくく兵へいをを用もちぎぎして地ちをを并あははる

る良將りやうしやうの智ちとヤベやべ山路やまぢががゆゆくと偽いつはり小せうははとと責殺せきころ

ままとと何なにの手間てま隙ひま入いりりへへや籠中ろうぢゆうの鳥とりととおおままりりと

中なかつへへくくの降くだるる叅さん城望じやうぼうひひばばのの流ながれれをを小任せうにんされれ此このははく

一夜いちやをを待まちれれひひとともも彼かれの分際ぶんぎわい小せう何程なんぢやうののままとと仕出ししゆ

ひひへへとと然しからら彼かれが請こふふままららせせられれ今宵こゝろががりり當城たうじやうの

圍城ゐじやう此このままぐぐ小せうをを置おきき關神戸せきしん乃な調畧てうりやくをを待まちせせららるるぐ

ききとと何なにの煩わづらひひららんんととヤや小せうどど佐久間さくまををままらられれ城

尤なほ然しかららとと同おなじじととるるふふららの織田殿おとだのをを然しかららばばままりり其

大関記二編卷十九

安きに付く計らふべしとて茶田が議ふと定まりぬ  
時より木下やける降を助はる軍の常ふゆども  
それを雙方弓矢不及たて面々の器量と思ひし  
陣頭小罷越さくや入ひそのるふはあれをきぬと  
かたより昨日まごも只今までを對々の思ひをさし  
修羅乃力城くさひひーそのが如斯やと如何ふを  
心得るくは城小籠にしまふく一夜の猶豫くは  
むとのるの近比以て鹿忽小覺の半時の暇小奇計を行  
ふと智者の習ふく山路あどの者が俄に降らんといひ  
まのをも一夜の内小兩家を定めんとする返ましく心許  
さし然まこと茶田佐久間の意見とつひ殿ふも同心

以上は免角や不及と云織田殿さるるつ茶田山路  
が中如く取計さしと仰られから勝家承より大手の責  
口小趣き城中へ使を送り降参のる関神戸乃る相違なき  
小於くは神妙のまをり今宵中不計畧を廻らさるべき  
旨随分仕落のちを様計らひゆと遣はまば関神戸の  
者共の内幕下小伺候せん一定ふく更く疑なきは某を  
城開きし人数城探入の上ふく中勸めはる彼等得心  
仕まどく存は使を某が使と共小神戸へ遣はし神戸同  
心仕はる具盛の使をさし添く関へつうに安  
藝守を異儀中べき人ふくは使の往來の間當  
城を某小預より下は様願ひなるたし如斯進退とも小

大月二編卷一乙

窮了の身小あれど死生共に計ひ小ゆとや勝家去れを聞  
本陣へとの旨を遣一けま即織田殿乃使者二人高岡  
乃城小入る山路より面會せられ山路書簡を郎等二人  
小りせせ織田殿乃陣小参らと如斯く遣一ゆと  
と存但別の思召をいささかの旨仰下さるべくいとや  
と一か山路の心体疑ふき小あはれと柴田大小感心  
一神戸へ送る書翰を見ふ又疑ふべき筋を見はせむ  
勝家深く喜び山路が心中頼母くわりのなる

此一節をく楠七郎左衛門正具に授け一秘計小して  
た日と延さん為の謀あり然るを木下を是代つ  
たりと知柴田とこれと眞實と思ふ其知の長短を

見るに

此使者神戸小入る具盛に見参一山路より書翰を呈  
口状とのれを神戸信長の使者小對面一さぬ一饗  
應一そのも山路より旨小従る織田殿小合体へ國家繁  
榮の基ひある一我何ぞ別義を存せへらんや関安藝守  
るの一族ふれども心中より使者を遣一ゆ勸先  
て同心のこさ勢也一此旨宜く披露たのこ入はし  
中て彈正へ返書と認めし使者を返一ける織田殿乃使者  
高岡小返り初中後詳に言上一具盛の返書成せられ  
織田殿は覽して如斯あらば相違もあるはとこさ那  
りと大小悦ひる山路が使者を返一ゆ彈正心中こ



織田殿智計深く在由云人あまきと謀る易く  
 られまうとわひひへ再度柴田小付くやける様  
 具盛り関へ遣一關同心仕ひと定めく打連て  
 参りしべしその時一族一所小参上仕るべくはとあり  
 ると柴田何乃思慮ふも及た此上とさの遠慮  
 あまき謂ま一日もや暮近しとや素名へ歸  
 陣あまきくはとやと勧めなる小織田殿を野陣退  
 屈の折あれ何ふも歸陣あまきを由と觸るもま  
 木下大ふ驚き急ぎ本陣へ参上し降参乃實否ね  
 まま定まらざる内小圍を解ひと然るは是程  
 まま小責詰しと又勿々容易の義みは君ふの素

名へ還御いとも城責乃軍兵へ此ま小虎口を守りて一人をも  
 軽々敷動しはまと言上しは柴田様山路が降さ  
 露疑ふべき処なく神戸を既小此方の使み面會し山路を  
 同心乃よしと小言上しはれを彈正の味方大忠の侍と云  
 べしそれ小何じと怪しむ圍を解さるや兵士を勞して  
 却る人の誠心破と云べしは邊にせり山路を惡しと  
 思ふも故小左様小妨らんと見へる近頃公平なるぬ心  
 中りまると言りられ木下冷笑く浅々敷るを宣ふのうま  
 神文誓詞と云小及た人質を出してさ敵をば欺き計る  
 世の習ある小何を實義の印とは何を誠心の證と云るの  
 只一言の道理を聞て其弁舌小迷ひ猥小只今責拔べき城

大岡記二編卷十一

二

由はしるの何事ぞや此方の使者小神戸對面せし計りて  
神戸が降参の印といふといふ忽の計とすべし山路神戸の  
一族あり互に示し合いて欺くことを知る世の常なれば書  
翰や口状を以てそのまじき城を渡し其上小人質城  
請取さそのら其身陣へ参上して去り降参の證といへば  
これさきさき内軍兵退参思をよるはとすはりり  
田まはしく怒り既小双方争論不及たんと詰合諸將二  
人ともさき色々扱ふととを兩人募りて大事小たつる  
ぶゆを織田殿聞食木下が条道理をさまふけきば是小従が  
せのあつても然る時の柴田忽面目を失ふ小似り依て  
城責の人数を木下が議小従ふく残し置本陣をへ勝家がす

旨小就て衆名へ歸陣あべしと仰られぬ兩人とくち  
及む柴田即城中へ此旨を遣し六彈正重々は懇志乃  
段辱と礼謝ししり不と小織田殿を衆名へうそせめひ三  
方乃寄手の半過る本陣小従へ移さし木下が半小池  
田坂井等二十余騎も差添都合三千余騎小て城を圍り居  
るりりの

楠の智謀小依り織田殿陣中巷説乃事

并織田殿勢州より歸國の事

織田殿の衆名へ還御はしめて柴田木下が傍若無人の云條を  
憤アと怒氣さうとを宥め仰られぬか勝家も大將は  
小説小面目を施して憤怒の氣を散らける然る小濃州より



飛脚到來して甲州の武田信玄美濃乃西方三人衆のよきめよ  
 より縁者乃好を断大軍と以て惠奈土岐の郡より岐阜を襲  
 ちんと風聞あきりふく國中恐怖の思をば安堵仕らば  
 早々に歸陣然るべしとぞしける織田殿此告を聞食大り驚  
 りせのひまを思も寄さる大變うら如何もききと胸中穩一  
 かねどいささく有べきふらけは諸將の異見を尋らふ  
 何を只あされとて一言を説き者もは初勢州出陣乃  
 時木下の諫め処ころりめと思召付れり  
 更詮をききとて後悔の甲斐をなく歸國乃術と案  
 暮の所へ追々飛脚到來して甲州勢既小伊奈口より説向  
 の由と告なる是は楠正具が謀ふて虚説なるを巷説も卯

とてきき故小岐阜の留守居より飛脚をばなりしありけし  
 楠七郎左衛門常小間者を隣國小入置一故西方三人衆内と  
 信長は恨むるもの有由と聞出さる信長あも三人衆内  
 小一人不快ふおしめ者あるは伺ひ知てはれを謀の種  
 とさる又尾州犬山乃城主織田十郎左衛門信清織田殿尾  
 州と追れ甲州へ走入し信玄取立き犬山捨齋と號して奔  
 走しけしは知捨齋と二人衆と引合て信玄小美濃表發行  
 のを勸めしは近日惠奈口より乱入をきき由と流言せし  
 めしより岐阜留守居の者ども此の信トて如斯注進り  
 及びしあり然る小織田殿進退如何為べきと案ト煩ひ  
 ひし小柴田進出さしけるは當國乃る山路神戸降参相違

有はじつまは更不機遣ひ不及まはし左まられ早々歸國  
 然るにとやにけり使番と高岡ふちせく木下池田坂井  
 等不速に軍勢まらり引くまへ大將岐阜へ還御はしほ  
 を所ありと仰遣まらりふより木下池田坂井小向まらこ  
 れを必定濃州より變事とや來りしあまらまらとや  
 まく信トかじ某衆名へ行向ひ實否と正してのち再度  
 中進まへるまら夫まらとまら小軍勢機動くまらふら  
 と約束一木下へ從者四五人ふら衆名へ忝上へ何故不  
 歸國の催はらやと伺ひらら小織田殿彼注進の趣と告  
 らら木下承らり岐阜の注進まらと小輕忽の至とや  
 甲州の沙汰まらと小取ららる巷説ふてたららら證

據一月もまらる去巷説まらと小は心動まら只今に  
 入る北伊勢乃城々を打まらるは猶豫まはしはまらと乃殘  
 念まら抑武田の入道の軍略まらら小他人の勸めふよりて  
 輕々一軍伐散まらるそのふはら三人衆心を變て武  
 田家小内通仕りゆまら使者の口状まらら書翰の往復ふて  
 信玄勿々との詞と從ふと有まはし且岐阜出馬はし  
 して此月のまらめふらばいまら十日を過まら夫らりの日  
 際小いらく西美濃より甲府まら凡七十余里ふら路  
 程往來まらまら是いつまら知まら道理小まら全く謀士の  
 流言まらまら山路神戸降忝のまらを以て思へば  
 此國の生がまらまら謀小まら君と飯國まらまらまら為

の流言と推量とを推しあはれ山路が許へ高岡に  
 城を明渡し神戶具盛より人質を出し其身を  
 参上仕りゆくと仰遣をさしこれ義免角やさば此日頃  
 中せしる皆偽なり早々軍兵を進め攻潰し  
 濃州のことに於ては留守居の面々へ能々下知ありて風  
 聞の止むやうに計ひ然るくはの上ふ心ぐり思召は  
 たり二人衆を連れ召寄られ何となく陣頭より  
 さし置きはる何の心障りなきと申けるを聞て  
 勝家大ふ怒り高岡より出でひを君の計ゆ  
 其まふふ中止しひいら免角秀吉山路を惡むの余り  
 偽の降参を信じて軍勢止り今より美濃の注進を巷

説風聞とといふと某が執成を挫く為小君の計危あき  
 北伊勢は手小属せしを元來の領ふあはねさせ  
 損と申にあはれ本國より出来りるに容易の  
 みにいそげ速に歸國然るくはと申せし  
 某一人のまはれ佐久間林の老臣一同言上せしを秀吉  
 一人風聞虚説と申し何を證據しやとやと居丈高り  
 旬を木下きく柴田殿の詮をささるふ腹立を  
 よは邊の山路と何程乃懇意ありて彼が降参を信せらる  
 あや降参ふのめくも同く作法のものを何故ふその  
 作法とばらめしひいど誰り人質を出さば城を渡さ

於本人陣頭へ忝上をせざるれを降忝と云ふやいさ  
 美濃へ他國の人数あり寄ると云ふは先鋒を誰々行程を何  
 所今何へ陣を取ると云ふもささ小斯々や越ゆるは留守  
 居衆を輕忽ありその上美濃と甲府と國をどくく堺を  
 異小一は岐阜よりをまきり岩村塚の衆より注進やへ  
 小をねく乃約束相違仕るは以て虚説風聞とは存ひあり  
 某岐阜ふく當國に出馬を止めたり當國ふくは神速不  
 合戦と進めたりか川は本國の注進ふくは當國  
 の城々へは手遣あらせられ暫時小大功を立られんや  
 を勧めあるはしめ終るく君のは為を存ひよりの外那  
 くの更も不忠残存ぞはは邊と宿意を構ふるもんと

ち賤しきものさしりる所あは然しなぐ諸老臣  
 ち一同して君を守護しなぐせば歸國の事小某一手  
 何とく止りやぶきつれあは計小あを従ふべきと理  
 をはくして争ふ色なき無りの詞小強き逆らふ道を  
 ちなれは柴田も黙然として又いふはかゝる処は瀧川  
 左近中けるは木下のいたるは誠小透問を理あれり  
 盡さればまゝのいふべき方城あるは某たゞめ小出馬  
 勸せりし今おのれも無益の事をや出に似き近  
 比後悔仕の山路神戸ぐと某よく虚實を正し跡  
 りめ言上仕るべきあはいとや小織田殿をたのめ  
 引歸しるべき由を觸られく高岡の坂井池田を

召返し勢州のこゝの瀧川より後々進退不付て計ひ申  
べしと仰れ織田殿と濃州岐阜へは歸陣ありり  
此段柴田木下の問答流布本落字誤字多きものなり  
以後人の私意を以て漫り増加せし処少きなり  
因て一本小従ひしれを改刪す  
高岡城責永祿十年八月の事なれど武田信玄四十七  
歳織田殿廿四歳木下廿二歳あり

重修真書太閤記二編卷之十九終

重修真書太閤記二編卷之廿

織田殿木下が明察を感し後悔乃事

并丹羽林等勝家秀吉和平伐取結ぶ事

柴田勝家へ織田家随一の功臣小して武勇人小絶き軍陣  
小臨し鬼と呼ぶ不どの名士なれども兔角嫉妬乃念  
深くして常小木下と不快ありしが此度勢州小於之忠  
義伐論し我意の如く織田殿小歸國なすしめたりしかば  
聊憤怒を散し心地善と歡び居しり又木下秀吉十分乃  
理伐をもちあがり争論とさく諸老臣と共に濃州へ引返  
柴田佐久間の國をも誤はしめ歎息して此後の計策の

為小<sub>こ</sub>心<sub>こころ</sub>知<sub>し</sub>乃<sub>の</sub>近<sub>ちか</sub>臣<sub>しん</sub>哉<sub>や</sub>信<sub>しん</sub>濃<sub>のう</sub>堺<sub>さかい</sub>より伊<sub>い</sub>那<sub>な</sub>の郡<sub>ぐん</sub>か<sub>ら</sub>甲<sub>かう</sub>府<sub>ふ</sub>まで  
 忍<sub>しの</sub>びや<sub>り</sub>小<sub>こ</sub>遣<sub>つ</sub>へ<sub>り</sub>消息<sub>しよくし</sub>を伺<sub>う</sub>ら<sub>せ</sub>り<sub>し</sub>小<sub>こ</sub>元<sub>もと</sub>より跡<sub>あと</sub>形<sub>かたち</sub>を邪<sub>よこしま</sub>  
 き<sub>き</sub>り<sub>し</sub>小<sub>こ</sub>一<sub>いつ</sub>て然<sub>しか</sub>も信<sub>しん</sub>玄<sub>げん</sub>を六<sub>ろく</sub>月<sub>げつ</sub>半<sub>はん</sub>小<sub>こ</sub>甲<sub>かう</sub>府<sub>ふ</sub>出<sub>い</sub>馬<sub>ば</sub>あり<sub>し</sub>八<sub>はち</sub>  
 月<sub>げつ</sub>初<sub>しよ</sub>旬<sub>じゆん</sub>ま<sub>ま</sub>信<sub>しん</sub>州<sub>しゆ</sub>川<sub>せん</sub>中<sub>ちゆう</sub>島<sub>じま</sub>小<sub>こ</sub>對<sub>たい</sub>陣<sub>じん</sub>してあり<sub>し</sub>と<sub>た</sub>り<sub>し</sub>か<sub>ら</sub>り  
 聞<sub>き</sub>濟<sub>せい</sub>して<sub>し</sub>つ<sub>つ</sub>ら<sub>ら</sub>を<sub>を</sub>其<sub>その</sub>る<sub>る</sub>を竊<sub>ひそ</sub>小<sub>こ</sub>岐<sub>ぎ</sub>阜<sub>ふ</sub>言<sub>げん</sub>上<sub>じやう</sub>せ<sub>し</sub>か<sub>は</sub>織<sub>お</sub>  
 田<sub>た</sub>殿<sub>でん</sub>今<sub>いま</sub>小<sub>こ</sub>た<sub>た</sub>し<sub>し</sub>ぬ<sub>ぬ</sub>こと<sub>と</sub>あ<sub>あ</sub>ぐ<sub>ぐ</sub>木<sub>き</sub>下<sub>か</sub>り<sub>り</sub>遠<sub>えん</sub>慮<sub>りよ</sub>を甘<sub>かん</sub>心<sub>しん</sub>な<sub>な</sub>し<sub>し</sub>て<sub>て</sub>も<sub>も</sub>  
 其<sub>その</sub>後<sub>のち</sub>西<sub>せい</sub>方<sub>ほう</sub>三<sub>さん</sub>人<sub>にん</sub>衆<sub>しゆ</sub>を召<sub>め</sub>せ<sub>し</sub>ら<sub>れ</sub>風<sub>ふう</sub>聞<sub>き</sub>の次<sub>つぎ</sub>弟<sub>てい</sub>を以<sub>も</sub>て詮<sub>せん</sub>義<sub>ぎ</sub>あ  
 っ<sub>つ</sub>け<sub>し</sub>小<sub>こ</sub>三<sub>さん</sub>人<sub>にん</sub>衆<sub>しゆ</sub>大<sub>だい</sub>に驚<sub>おどろ</sub>き<sub>き</sub>迷<sub>ま</sub>惑<sub>くわく</sub>し<sub>し</sub>弓<sub>きゆう</sub>箭<sub>せん</sub>神<sub>しん</sub>を照<sub>しやう</sub>覽<sub>らん</sub>ひ<sub>ひ</sub>い  
 ろ<sub>ろ</sub>ぞ<sub>ぞ</sub>り<sub>り</sub>野<sub>や</sub>心<sub>しん</sub>を企<sub>く</sub>て<sub>て</sub>や<sub>や</sub>是<sub>こゝ</sub>皆<sub>みな</sub>勢<sub>せい</sub>州<sub>しゆ</sub>人<sub>にん</sub>乃<sub>の</sub>謀<sub>まう</sub>し<sub>し</sub>間<sub>ま</sub>者<sub>もの</sub>の  
 流<sub>りゆう</sub>言<sub>げん</sub>風<sub>ふう</sub>説<sub>せつ</sub>小<sub>こ</sub>之<sub>の</sub>い<sub>い</sub>へ<sub>り</sub>更<sub>さら</sub>小<sub>こ</sub>以<sub>も</sub>て思<sub>おも</sub>ひ<sub>ひ</sub>を寄<sub>よ</sub>ぬ<sub>ぬ</sub>こと<sub>と</sub>小<sub>こ</sub>之<sub>の</sub>い<sub>い</sub>は<sub>は</sub>  
 神<sub>しん</sub>文<sub>ぶん</sub>をな<sub>な</sub>り<sub>り</sub>し<sub>し</sub>織<sub>お</sub>田<sub>た</sub>殿<sub>でん</sub>の疑<sub>ぎ</sub>氷<sub>ひやう</sub>忽<sub>い</sub>ち<sub>ち</sub>小<sub>こ</sub>散<sub>さん</sub>し<sub>し</sub>二<sub>に</sub>人<sub>にん</sub>衆<sub>しゆ</sub>も安<sub>あん</sub>堵<sub>と</sub>

乃<sub>の</sub>お<sub>の</sub>い<sub>い</sub>を<sub>を</sub>な<sub>な</sub>り<sub>り</sub>し<sub>し</sub>織<sub>お</sub>田<sub>た</sub>殿<sub>でん</sub>の疑<sub>ぎ</sub>氷<sub>ひやう</sub>忽<sub>い</sub>ち<sub>ち</sub>小<sub>こ</sub>散<sub>さん</sub>し<sub>し</sub>二<sub>に</sub>人<sub>にん</sub>衆<sub>しゆ</sub>も安<sub>あん</sub>堵<sub>と</sub>  
 永<sub>えい</sub>祿<sub>りく</sub>十<sub>じゆ</sub>年<sub>ねん</sub>六<sub>ろく</sub>月<sub>げつ</sub>中<sub>ちゆう</sub>旬<sub>じゆん</sub>信<sub>しん</sub>玄<sub>げん</sub>甲<sub>かう</sub>府<sub>ふ</sub>を<sub>を</sub>出<sub>い</sub>馬<sub>ば</sub>信<sub>しん</sub>州<sub>しゆ</sub>川<sub>せん</sub>中<sub>ちゆう</sub>島<sub>じま</sub>小<sub>こ</sub>  
 景<sub>けい</sub>虎<sub>こ</sub>と對<sub>たい</sub>陣<sub>じん</sub>あり<sub>し</sub>小<sub>こ</sub>景<sub>けい</sub>虎<sub>こ</sub>上<sub>じやう</sub>州<sub>しゆ</sub>陣<sub>じん</sub>替<sub>か</sub>あり<sub>し</sub>小<sub>こ</sub>之<sub>の</sub>い<sub>い</sub>は<sub>は</sub>  
 信<sub>しん</sub>玄<sub>げん</sub>小<sub>こ</sub>を八<sub>はち</sub>月<sub>げつ</sub>上<sub>じやう</sub>旬<sub>じゆん</sub>甲<sub>かう</sub>府<sub>ふ</sub>へ<sub>へ</sub>歸<sub>き</sub>陣<sub>じん</sub>の<sub>の</sub>よ<sub>よ</sub>し<sub>し</sub>甲<sub>かう</sub>陽<sub>やう</sub>乃<sub>の</sub>舊<sub>きゆう</sub>記<sub>き</sub>あり<sub>し</sub>  
 見<sub>み</sub>え<sub>り</sub>し<sub>し</sub>の<sub>の</sub>め<sub>め</sub>  
 但<sub>た</sub>三<sub>さん</sub>人<sub>にん</sub>衆<sub>しゆ</sub>の中<sub>ちゆう</sub>小<sub>こ</sub>之<sub>の</sub>い<sub>い</sub>は<sub>は</sub>伊<sub>い</sub>賀<sub>か</sub>伊<sub>い</sub>賀<sub>か</sub>守<sub>しゆ</sub>を織<sub>お</sub>田<sub>た</sub>殿<sub>でん</sub>乃<sub>の</sub>惡<sub>あく</sub>ま<sub>ま</sub>せ<sub>し</sub>り<sub>し</sub>や<sub>や</sub>  
 云<sub>い</sub>ふ<sub>ふ</sub>と<sub>と</sub>織<sub>お</sub>田<sub>た</sub>殿<sub>でん</sub>岐<sub>ぎ</sub>阜<sub>ふ</sub>へ<sub>へ</sub>移<sub>うつ</sub>徙<sub>て</sub>あり<sub>し</sub>け<sub>け</sub>る<sub>る</sub>時<sub>とき</sub>伊<sub>い</sub>賀<sub>か</sub>守<sub>しゆ</sub>が<sub>が</sub>人<sub>にん</sub>小<sub>こ</sub>語<sub>ご</sub>る<sub>る</sub>哉<sub>や</sub>  
 け<sub>け</sub>ら<sub>ら</sub>我<sub>われ</sub>々<sub>々</sub>の粉<sub>こな</sub>骨<sub>こつ</sub>して忠<sub>ちゆう</sub>義<sub>ぎ</sub>を盡<sub>つく</sub>せ<sub>し</sub>て<sub>て</sub>以<sub>も</sub>てか<sub>か</sub>様<sub>さま</sub>小<sub>こ</sub>の<sub>の</sub>い<sub>い</sub>は<sub>は</sub>  
 々<sub>々</sub>あり<sub>し</sub>に<sub>に</sub>我<sub>われ</sub>等<sub>ら</sub>が<sub>が</sub>力<sub>ちから</sub>を盡<sub>つく</sub>す<sub>す</sub>こと<sub>と</sub>の<sub>の</sub>い<sub>い</sub>は<sub>は</sub>争<sub>まが</sub>ひ<sub>ひ</sub>今日<sub>けふ</sub>の<sub>の</sub>  
 榮<sub>さか</sub>哉<sub>や</sub>見<sub>み</sub>る<sub>る</sub>べ<sub>べ</sub>ら<sub>ら</sub>ん<sub>ん</sub>や<sub>や</sub>と<sub>と</sub>や<sub>や</sub>を<sub>を</sub>な<sub>な</sub>り<sub>り</sub>し<sub>し</sub>織<sub>お</sub>田<sub>た</sub>殿<sub>でん</sub>乃<sub>の</sub>惡<sub>あく</sub>ま<sub>ま</sub>せ<sub>し</sub>り<sub>し</sub>や<sub>や</sub>  
 乃<sub>の</sub>有<sub>あ</sub>り<sub>し</sub>小<sub>こ</sub>之<sub>の</sub>い<sub>い</sub>は<sub>は</sub>織<sub>お</sub>田<sub>た</sub>殿<sub>でん</sub>を<sub>を</sub>な<sub>な</sub>り<sub>り</sub>し<sub>し</sub>怒<sub>いか</sub>り<sub>り</sub>し<sub>し</sub>伊<sub>い</sub>賀<sub>か</sub>守<sub>しゆ</sub>哉<sub>や</sub>誅<sub>さつ</sub>を

らと仰られぬと木下様々諫めたり目出度移徙の  
 じら小左様乃より努力くあさぐりむと制せし故に  
 まう小左様はわかれかどを伊賀守小左あしらの疎畧を  
 小隔心ある処よりして流言を行われしをまきへ大將たるん  
 人乃心小秘して思ふべきをば織田殿と甲州の沙汰乃  
 虚説たるなり城間召定められ三人衆の神文小左心もち  
 居のひしと木下密小言上りたる様只今へ三人衆何乃  
 意趣もろくは共是等のよりして如何ある心變も出べきや  
 計がし彼等が心は安くしひたりてさめ小三人一同り休  
 下ものひたりやと勸めりしむ織田殿も可然と同心ま

は村井長門守不破河内守を使者とし三人衆へ遣はされ  
 面々太刀一腰小袖一重城賜りぬ弥疎意たる旨城中送り  
 のひしから三人衆恐ま入る拜領し即時小岐阜へ伺候し  
 君臣安堵の喜びものよりの濃州のことかく穩やう小治り  
 りまは勢州乃便宜いりて待不し小龍川方より飛脚到  
 來し山路彈正神戶藏人降参を偽ふく只織田勢城帰  
 國をさしめんとの謀小して甲府乃風聞せりしむ虚言  
 ありとたか小承了し由と山路が許へ使者を送り  
 降参乃便宜を催促せし小使者を嘲り笑ふく信長ふ  
 び愛小來らば今川義元乃如くたるしめんとの旨め  
 ける旨を注進せしむる織田殿跳り上りて拳城小

其の大小怒り憤りその義ありば早々押寄城を  
 潰し籠城の兵士を殺し小まさんとならば出馬の  
 旨を下知ありし小木下承らり大諫めなりけり  
 敵を防戦の用意をせし故悪口を以て君城怒らせ其  
 怒に乗じて責寄するも待と見えし其のいふる  
 無禮の過言をやりし耳小ま聞食入るひを言はる  
 銳氣を避させりし然るも時節を待せられしや  
 と言上しければ織田殿聞食我汝が諫を用ひば歸國せ  
 しと後悔りしその甲斐なき如何小まして此憤を  
 晴ませしやと仰らるしは木下君の武威の高運に乗  
 し玉ふられしは出陣ありしは勝利ありしなり相

違ふるをいふも其の勝利ありし時を計らせ  
 りし然るに鹿忽し出陣し味方の損亡多く  
 べしは歸國ありしと城後悔はしるも是も残り  
 多たふ似るも始終は為然るべくはあり其の故に  
 衆名あり其の旨小就せられしは柴田佐久間  
 りし無本意のひびしその上は累代乃老臣とし其  
 説乃用ひしは其の憤りし君を恨むるは是を  
 小まいしは勢州は手小属ししを老臣乃意を失  
 せりし其の功薄くしき君は歸國ありし故柴田佐  
 久間本意の如くありしは君臣安穩不在なり万歳  
 の基とすは存し勢州を運速ししは手小入る



くと遠くすすひと言上りけるふらぬ織田殿木下が功不  
 誇らば老臣どもをも重なりしは一言を深く甘心に  
 一ひ勢州出馬のこゝの時乃至るを待てどもありや仰  
 出されり然るふ織田殿と木下との閑談を林佐渡守  
 丹羽五郎左衛門は次小伺候して遠く聞終り誠り  
 木下へ忠義一途ふして功小慕らざる士ありたり尋常  
 の者たるべ己が先見の明らりある小誇りて織田佐久間  
 の失を舉國誤りしを嘲りてし誹りもなきを左の  
 まくて却て我言乃行われしを悦びけるその度量  
 乃大なること凡人の及ぶ処ふあはれりたり其は我とは  
 知らば柴田佐久間を嫉むる後り不快ふおのり

こと長臣の身ふとりて穩便るる心ありいざや柴田  
 木下和平せむべ但内々殿の旨を伺ふ取扱ふ  
 ふを然るべきとて丹羽林打はまは前小参上り此  
 趣を上げまは神妙あり早く和平を取結べよと仰  
 られしふより林と柴田と入魂あり因る勝家の宿  
 所不行向ひ側聞せし木下が口状をさるけまは柴田  
 を心中に深く慚入且勢州の始末をさる木下が如く  
 ありしと驚く小餘ありその上小若き新赤松の  
 穩やうふりてまは老臣として不快せしむること  
 邊の思ふとらさるるがりくまはひつりまは  
 邊乃周旋りまはさるるひ別義中はしと答はれし佐



召出されは益々とのまかりけきば木下畏り多弁にして不  
敬を顧みずは怒ふられしは免と蒙りぬに  
く存ひ然ることも心中一物を貯ひるの無之は間幾重  
を以て聞えりしは下大切の評定乃妨ふありありは松  
願ひせると申けるふりり 兼田佐久間もあつた  
埃撥しけきば織田殿悦びましく我一大る成就を  
時至れりこの後つらき志を一ふして忠勤をほくし  
いと仰らるるれく小物を賜ふられ上下  
あひの声遠くきこえり

木下藤吉郎遠計言上の事

并織田殿佐々木義秀と智ふ事

丹羽五郎左衛門尉林佐渡守等取持みり兼田佐久間木  
下和平とのひ織田家中安堵のわびをまじ  
織田殿あはれは悦喜ゆりおの上武田家と再縁をむ  
をこれ結納取替しを濟く甲濃和親外ふり後  
掛乃敵國も無きふり再度勢州へ出馬の催あり  
木下あゆの由けききり時即冬ふり寒氣の折  
ち士卒難澁仕へし來春温暖なる比出陣し  
遅かりし其れらふ便宜の計策をいへしと上  
ふりあゆの意ふきりせられ出陣の沙汰は罷  
らるる時木下密ふり上るは参州の縁者の  
國より更りし心遣ひあるへり甲州より程

木下言二終元  
正入輿のたゞ一家の所りしとあはれ是も安穩の正  
あつては上洛の思召あつてせらるるに  
あれは上方小腹心の國持とては都合あつて  
就中江州と王城ふとて関東通路の咽喉ふしかる國  
親しくとてこれとて京都の往來自由を得る方  
との正手等とてあつて幸江州屋形佐々木義秀はま  
ご内室の沙汰ふ承は彼屋形と縁者とてこれと  
可然と申上げると織田殿聞りて此義誠不良策と  
れとて義秀得心を辱つてやいとや知ぐとて怒り  
言出してその調をばと面目を失ふに似たりや宣  
ふ浅木下承たりと乃正使をれとて仰付たりと

江州へさうり上り申とて望やとて織  
田殿もろよとせよ其方罷向ひて申入ふみやると  
成就とてとて即使郎を命せらる木下畏りその支  
度残とてとて抑織田殿を元尾州四郡の主  
今八尾濃二州城押領し木下をむとて引替り洲  
の股一城の主とて召具乃供人多く出立とて  
洲の股とて観音寺の城とて今道十五里半とて  
のり但寝物語の里とて洲股とて七里半濃州の  
地ふと木下の領知とて寝物語とて愛智川まで  
七里半餘を江州坂田犬上神崎の郡ふと江北佐々木  
京極の領とて

木下言二編卷十

観音寺の城下の住り織田信長の使者木下藤吉郎  
秀吉赤上の由城案内をば當直の兵士にせしめ  
小中次して本丸不達しりる小屋形義秀へ元より木  
下城懇志不思われし別義を承禎入道も先  
年面會せしものより呼入るしと云ふより早く  
本丸へ入りし由木下を請せらる木下座敷  
不罷出まば義秀日比の疎遠本意をばしる由城中  
出られし木下も先年加勢のより小武器貸借  
は乃勢ふのり今川を討し悦を述べその後軍國の  
暇をさす心の外不打絶しり急をとり次今  
般参上の趣意信長別して懇望の義ありしを窺ひ

之を為不伺候仕の故に信長一人乃息女之  
あり今年十六歳不及び願しり屋形乃簾中より  
移し居り度いさされ江濃尾の三州一家乃より  
み成結ひ外冠をせしめ兩家長久乃基を固く仕ひ  
むやと願ひまの義聞入しり信長大慶仕る秀  
吉をも面目を施し義不しり屋形義秀信長乃  
姻志より以て悦入しり婚姻乃礼を不容易大  
義あり評定乃上返答すべしり暫く休息あり  
居りし別席へ招きしり饗應せしり評  
定ありける不承禎入道を三好三人衆乃頼をうけ阿  
波乃所義榮を後見せんとおのり織田殿を縁組

せよ後より信長を斯波乃家人不之陪臣あり  
 佐々木と縁組似合し、かつ將軍家乃息女當家入興  
 乃先蹤あり、今度を京都ふりは、と障  
 永祿八年五月將軍義輝公は、あり、後同九  
 年十二月廿日阿波は所義維乃長子義榮上洛し、  
 五位小叙し、同十一年二月八日左馬頭より任、征  
 夷將軍宣下あり、ふとの翌日九日腫物を患、  
 卒去、ふを乃比、二好一族義榮を奔走、  
 時あり、但六角家へ將軍家息女入興、の、正  
 或をの不見へ、証と、  
 屋形を當時乃處、ふの織田を斯波の被管と早

り、勢を、乃領、地既、尾州、濃州、三州の主、  
 其の勢、に四方、不振、へり、武威、さ、  
 る、誰、これと、鋒、を争、ふ、是と、縁、を結、び、入、魂、  
 不、な、し、な、ば、の、ふ、付、く、助、と、な、る、と、多、う、  
 是と、恨、城、釀、し、寇、讎、と、な、り、終、つ、の、國、の、為、あ、し、  
 尤、も、其、上、不、彼、方、の、姫、君、と、な、り、迎、え、  
 き、な、り、旗、下、の、衆、より、人、質、と、り、し、と、同、ト、意、  
 あり、な、り、縁、組、と、な、り、く、い、な、し、と、同、ト、  
 け、ま、ば、ふ、び、木、下、を、座、敷、不、迎、え、信、長、仰、ま、さ、れ、  
 ごとく、両、家、縁、を、な、し、ひ、す、へ、只、今、兩、國、と、な、り、静

大略言二終  
謚乃時ありやくは輿入あふき由返答ありき事れを  
秀吉大悦びあのみ旨信長ふや追く吉のす上屋  
とちて岐阜へ引返し佐々木屋形の答言すしけまどを  
是より木下り手柄ありと厚く賞美ありき事れあり  
輿入と急ぐせらるる此姫君と信長の弟武藏守信行を  
息女あり信行生害乃時女子一人男子一人ありき事れ  
佐渡守ふらりもあられ成人の後大隅守信廣乃養  
子ふありしあり姫君よりありき事れ後男子とて  
元服とほせ織田七兵衛信澄と名乗せしり免角とて  
うち小江州より結納乃使者岐阜へ参上しけま織田  
殿種々馳走仰付られ引出物あふき賜ありき事れの年

十月下旬良辰を撰り輿入の式成るのへら筑塔を  
成るの品く一族中への進物家老以下諸士への土産  
善哉盡し美をほくされ六角家の祝着は斜  
らるる姫君も無雙美人ありき事れ屋形とむし  
く借老のちより浅くさるとかや  
義秀婚姻の二節比校すきをのち真偽未決也  
織田武藏守信行と信長の弟あり弘治三年末森ふ  
く生害あり信長廿四歳の時あり其の姫君今年十  
六歳とて天文廿一年の誕生ふ六歳父を喪す七  
兵衛信澄の姉あり然れども織田系圖不多く  
此七也

大略記二編卷之二十一  
信長十六歳ふして父信秀乃遺跡城相續しいま永禄  
十年ふりて十九年の間小尾州城切從へ濃州を并吞  
し三州と縁城組武田と親しくあり又江州佐々木六  
角を縁者とあり武勇乃名家と交り城厚くせしむ  
その威自然と天下ふれやき四海の乱を切きりり太  
平の代となさるん人を織田殿あらざるとおもひぬ人も  
ふりりりりり

重修真書太閤記二編卷之廿終

重修真書太閤記二編卷之二十一

織田殿重く勢州發向乃事

并木下藤吉郎仁義の軍乃事

吉人乃善をか惟日足は凶人の不善をおすもま  
と惟日たゞはとかや善惡邪正その行ひ異ありと  
云共進む心を異あると好し只その善に進むもの  
ハ日くよその善を盛んふして其の惡を黜くるを  
以て終は惡盡く善全しその惡に進むものは日く  
ふそれ惡を盛みして其の善を亡びずが故り終ふ  
善盡く惡全しと云る宜ある哉木下藤吉郎永禄元



年の秋始く織田殿ふ仕え卑賤乃勤くりしが忠信  
義乃三と守り曰くふ善道は進く事と計り  
バ自然と立身出頭して十年の間ふ君と尾濃二州  
乃主とありその身洲股一城と居處として四郡の  
租税と食禄とすするり至る蓋忠功誠心の致す處と  
云へ去程は永祿十年も暮く明とは同十一年の  
春とあり然る織田殿去年勢州は出馬あり  
うどの其功あり歸國あり山路神戸等が  
降参と今やくと待ひけるその事偽ふして全  
く彼等と謀らんと怒らせり再度出馬と催  
ふさとしに木下藤吉郎是を諫めしかば其年の出

陣と止むひしが今既ふ春も深くあり軍兵の調練  
もよく熟たり速く出陣し勢州を撃破り去年の  
辱と雪ぐんと有ける木下つらく去年高岡の城  
と圍く既ふ攻落すべりしと山路彈正降参を請  
ふ依り御歸陣ありし處彼等約を變ト信と破る此  
度此御陣ハ其罪と責らるるを以て名となす故  
り軍み理ありと云共まづ使者を高岡へ遣はせ  
降参延引乃儀を糾さすその後御出馬あらせり  
るべし如斯時君の道理の且穩便仁惠の沙汰  
汰ふとば彼國人等とれりし心中山路を偽と  
惡む心も出来ず歸伏するに至るべき我君諸國

大目録二編卷之三十一

二

を征伐かゝり玉ふと騒亂を鎮めく四海一統靜謐な  
 らしめんと此御本意を合戦を止むを得ざる處  
 あり去は此度もよろしく仁惠を以て民百姓をか  
 つる義理を明らかふしと武士の意を照しめは  
 當時の收納強く賦役重きも苦む蒼生ども君乃  
 御旗をいつりと待望むと早ふ雨を祈る如くは  
 べし然バ勢州のとなり隣國他國乃もの共い  
 下も御出馬を望み御旗をもち迎え奉るべし是天  
 下と一統をべき軍略をてし御使者罷向く利解  
 聞ゆ山路歸伏いささば大軍を以て取圍く威  
 と示し武を張るその罪を責られれば士卒を損ぞ

び又血ぬらば城を下しゆへと申けるみ  
 より織田殿尤然るべしと即使者を仕立て高岡  
 小遣えと山路返答を聞ける彈正ノ様某  
 神戸と申合せ關安藝守を歸伏しと三人一所  
 遣ハ相談をむる處關より何とも不申越は間  
 遣ハ催促申遣えし使の往復し手間取はうち何と  
 う思召ひひけん御陣を拂く御引退きありか  
 其方みく御違變と存今まで何とも不申進は某御  
 陣へ参上せしともかく人質をいらせしともゆ  
 ぬバ降参の志るしなさを降参違變と仰らる事

大陣記二編卷之三十一  
たそ却く心得難くひなき御勢退去乃時これ方  
より追掛中さきまにゆりて某が寸志をば知  
めすべきめれを左をねく違約の罪を蒙るちと迷  
惑千萬に存いとありかば織田殿聞食大に怒  
多ひ其儀ならバ速に押寄責潰せとて同年二月八  
日岐阜出馬と定めらる相従ふ軍勢を美濃尾張及ひ  
三州の加勢并勢州降参乃軍兵合とて四萬餘騎  
とぞ聞えける信長初陣の始ありかか大軍を引  
率に給ひしとなつるまいかども太刀風猛烈に  
そあこまを拂ひまへり今斯の如く乃勢あまバ威  
風日頃倍に旌旗の打靡くありさゆたとくを取

よものあり既み桑名より着陣有るまは龍川出迎へ  
奉る城中に御陣と居らる總軍ハ桑名郷中み充  
満にたりあり  
岐阜より清洲へ六里半清洲より桑名へま六  
里餘あり四萬餘騎と三間み壹騎と積至十二萬  
間餘に當る即二千町餘と知べし二千町を五十  
五里半二町餘に當時人數押へりなりん  
勢北の輩その威よあそれ安き心をあかりけりさ  
れ共高岡神戸八田安濃津細野關乃輩ハ少くも屈  
をば籠城して寄手遅しと待掛たり織田殿ハ去年  
よりの意趣もあまはまづ高岡を攻落し即時に神

大陣記二編卷之三十一

四

戸へ押寄べしとやらを給ふを木下藤吉郎承て  
味方大軍を興し御出馬ありしハ彼一城二城を  
攻潰し御腹いさを給ふんやの御事り勢北を切  
靡けらむんとの御本意わかちど乃御勢ふ山路  
神戸を攻殺されんと御威光薄きふ似たり彼等如  
き小人を御計ひよりて眞實に降参仕るべきなり  
く仁慧と義理とを示されんと此時あていと諫  
免られ信長さまあめ彼輩も去年我を欺き先  
比使者は對して無禮とありたるもの共之本心よ  
り降参覺束るより降参するとも後來の慶信ト  
難しと宣ひけるを木下左様は疑ふをふくハ敵

を用て敵を防がし免んと難くは彼等が本心降伏  
仕様よつとけべき手段もいまづ味方の軍勢と  
諸方へ分遣し勢北の城を攻む様ふ見をいそい  
小身乃國人ども聞怖して便宜を求め御旗下に降  
参しべしそれらふ出格の御恵を施さむ本領そ此  
は仰付られぬも城を籠る所の侍どもつづき  
も其等の縁者あはぬいなくはへハ次第くま心替  
り仕様べし持の間まよと行ふた謀のいと勧め  
奉りしかば織田殿尤とおなりめ即諸軍の手分  
をなすひ三千餘騎と一手として關の城八田の  
城安濃津の城細野の城神戸の城高岡乃城それ外

峯鹿伏菟國府等の城へ差向ふ  
關の城を弘治元年ふ龜山より移さし由伊勢風土  
記ふ云り桑名より龜山より今道八里廿六町あ  
る矢田より前よりつり安濃津城へ八十二里十九  
町あり城主は中尾内藏助あり細野の城を阿濃  
村細野よりありと云り行程津とありと峯乃城ハ鈴  
鹿郡川崎村ありと峯長門守居城あり鹿伏菟を  
同ト郡鹿伏菟村今より加太と書る坂下の南あり  
ハ桑名より十一里廿六町許と知べし國府ハ同  
ト郡なり城主國府佐渡守と云桑名より六里廿  
六町餘あるへし神戸より西南ふ當ふ

その外は五百騎六百騎あるは千騎の城の間  
隔一處一陣とを加勢の如く繋ぎしは備を配り  
諸城一時に攻落し盡さ体みぞ見せたりありおの  
間ハ一村一郷の待ども乃許へ使を立られ國司  
北畠殿の政事とせし由と告百姓乃困窮を救え  
ん為ふ出陣ありしはとせしは一味同心して國中  
静謐の謀をなすべしむは仰遣もさしけるはと元  
より大軍は肝と消如何せん浮足ありける者な  
きは千種宇野郡赤堀稻生の住士とて降参して  
桑名の本陣を参上し先手より加らんとを望めり  
三重郡千種村ふ千種常陸介南朝第一の功臣宰

大問記二編卷之三十一

六

相忠顯朝臣の後胤赤堀左京大夫國虎と云秀郷の末孫朝明郡羽津村に住たり稻生ハ奄藝郡稻生村に稻生勘解由左衛門と云り此あり物部の弓削氏にして守屋大連の後あり

織田殿おれ等とあつくりてあさると懸懸の挨拶ありて國人いづれも聞しふゆする信長の大將ありと甘心しそ次第とて傳えこれちくと打連參つたれハ籠城の侍共大軍を圍むのち頼む処ハ國人の後誥のとなりて加様は敵に加はると見く心細くあひひける上の事あはば然るに便宜もあはばと怖畏といふをなす四方のありさるを

のこ伺ひ居く結句合戦の心ハうとにたりかゝる処へ木下が密意をうけ事おあはする梶田稻田等が手の兵士等敵陣に忍び入江州の佐々木六角信長ふたのまれ十草杉谷の邊まで大軍をて出陣ありて織田お加勢のよきをかたり今日明日のうちハ國中へ亂入はべきなきといひあらしけること誰いあはる城に聞えしや織田の軍勢をて目ああまりて防ごかこまると江州より援兵あはる何あしと戦ひをバいとむらむと狼狽さるる斗にはる防禦の手當ハおもひもよらばされども織田殿の軍令嚴重ふして下知なき内もごりに攻かることあられとの事あはる遠巻して

備と堅めあつて居りしをいふ何もの城中も  
退屈し困窮の体り見ゆればさうして一時攻め  
落さんと評義ありけるふ藤吉郎今あそか称え  
計策を行ふ時節よていと言上りし高岡の城へ辨  
舌勝とていものを使者よ仕立と遣はし利害を説  
示されれば山路彈正いやは先非と悔と實に降参  
仕るべき形もかまへ此邊の謀主あるが故に彈正一  
人味方よ参りければ其の目つりの輩もさへ降参  
仕給ふたありあそれ某御使となり城ふ入ゆそや  
と望しける時信長宣ひけるは當國の輩多偽とを  
あしは一旦その身の苦しきやうに降参するとも

味方歸陣のちハかからば志を變て敵とあるべし  
それと如何おもへぬと尋ぬるは藤吉郎申はく  
去年の降参は元より彼者のエミし處に今度も勢盡  
く誠よ降参すべく思へども去年の不義を惡しと  
あふし此度を御免あるまうと存して止しとて得次籠  
城に居るのなれば恩言とて招きとめは必定歸伏仕  
べしその様に入城の上よて言上すべく去るが御  
陣をば高岡よ移させぬ御威光を御示しべしと  
申けるも危きことには思召ども然らざる計ら  
ぬいと許さ勢多しハ木下從者もつりふ三人を召  
具し山路が城へ案内して入るのち織田殿旗本二

大内言二編卷之三十一

万餘より四方を取巻一舉小責落るべし勢を示されり

木下山路の利害を説事

并山路本心降参の事

高岡城中ありハ寄手の猛威あるを恐るゝ色あり是れ去年美濃勢を偽りて歸陣せしめし露顯せしを以て信長憤みのかちどの大軍を起して取圍しあせバ何れも必死と覺悟し命をとり防戦し扱の上より討死せしやと末く迄も勇氣を勵まし義を勧め待居りし織田勢三千餘騎押寄て城の四方を打ちめし攻んとせし

夜晝三日あり守り居ける故城中の軍兵勇氣緩上下退屈し生るとも死ぬるとも扱乃境より至らざるやとつふを聞き山路あり様か様か對陣のしあき日數を経ば城中心替りぬれ出來しと然らんも味方大事あり及ばし夜討らざれば味方の銳氣を付むやとあせり寄手用心嚴重なまそそれも叶はば如何とせざるやと晝夜安き心もななくありし処へ木下藤吉郎織田殿の使者として門外より來り案内を請ひ山路彈正大手の櫓のあり使者の体をも治りし總軍をもちて遠く備へ門外には兵士三人を召連するのし彈正心よあり様



たり鬼神なりともさうう四ノ人我等も必死の者なり  
 何奈恐ることあるを聞きや使と聞き對面せしむるも臆ま  
 るふ似多りとして小門を開いて使者を迎入彈正も本  
 丸へ入るも我待木下も案内の兵士と共に本丸へ  
 至りけるも彈正さらさら禮をすることなし木下笑座ふ  
 著は山路あれとてゆさるるも汝ハ信長の使ありや  
 何の爲ふ来たるや我も笑ふも一言も發せしむると不審  
 ありと云木下答く我も大國の使節よして當城中危  
 急は逼るもの共と哀れとてそれらを救はん爲に入來  
 する処あり宜しく敬禮を加へ招請し謹く上意を  
 承べきは無禮を働き我我侮座と立とを成さるるに

何とぞや人あして禮なき禽獸も等敵味方と  
 分れても武士の品も依て禮義をあるものぞ其方  
 身の剛勇あり誇り大國と恐るは國を亡し一家  
 を失ひ民百姓の死傷をかなしませんと一城  
 主の徳もそむけるに誤あらざやとつハ彈正我  
 信長も何の所縁もあらざれば禮を辱れた所以を知れた  
 とへ信長自身罪越ふ共信長乃仕向よりてそま  
 不との答禮をばあそへしんや汝を信長の家人  
 く我と匹敵をばきめのはあはれ勇士の籠城家を破  
 る身を殺せしと元より期したるごとく民百姓の死傷  
 かあしはばざるありあはれも合戦の習止とを得ざる

處く然る我汝城中の危急を救ふあんど、無益此  
言葉と費まるとまゝある不當あを夫のそ急使あふ  
くや立歸るへ一隙取ハ災あるべし蘇秦張儀として  
辨せしむる共我心を動くさんと思ひもよしくいし聲を  
振てて言せし木下我元よを辨舌利口を頼もよそ  
か川汝ちと乃侍さのそ所望もあはれ降参を勸  
むる意あり汝戦く死くハ心のゆゑに死よか我主  
織田殿乃本意多くの百姓等の罪ありて戦場の役  
み苦しめられ剩死神よそそこれく非業も死は教  
とあそむるもつゝ軍勢を發しあふたれハ仁惠義  
理の軍とつゝふる一汝聞まや濃州齋藤龍興無道

と征伐ありあふ軍とさし向むひし小民を罪し玉  
そぞあれを哀れくあふり故し龍興終は民し棄られ  
其の國も安堵せず他國たり龍興出國のち美濃の  
國乃諸侍つとく織田家も従ひ今もあはの陣中よ  
随ふく来りほむども悉く臆病のめはあはれ已  
り勇氣を費んためは無理も死あをあらんをバ誰  
らうかといふべけん國司の北畠殿とても汝が先祖より  
累代相傳の主人あをあらし又神戸が親族もく  
その旗下なれハ止し我得ぞ籠城したるはあら  
むや汝一人死を好とも神戸が心をバ知すし既し  
神戸ハ家名の絶ざらん様も願ひ居るめのと汝何

とく神戶をも止さんとはあるまじき汝を神戶が為  
やなるもの神戶が仇とあふめぬ心問く心  
知るべし又神戶のふあらば峯鹿伏菟國府安濃  
津もく勢北乃城多勢を以て取巻を以て攻落  
さんハ安けしども無益ニ民百姓の打死さん  
不敏さよ此三日の間いさ軍を許しれ是  
て織田殿の軍ぶり成ありひ知る處一汝ハ當國名  
譽の勇士もてありも寄手のめふ先手なる此城  
よあまは汝が心をまぬお人もあるべし汝が家國  
を穩やり汝が一族も安泰ニ汝り民百姓もよろこぶ  
道とて家國を亡し一族を危ふし民百姓を苦

あはむむるをよろあぶ汝が心をば虎狼とやいそん  
神戶關の氏族を數代相續の名家あるを今も、ふ  
斷絶せしめんも相續せしめんも惟是汝の心あり  
信長民をあはれみ心あうくすは道を非道の合戦  
をありあそねども江州の加勢まで國境まで出  
張を由注進あり兩旗乃勢をとんと十萬及べり  
勇戦を好むふとも去大軍と掛合し鐵炮の玉  
中も命をまつること近北おかすや是れどの事  
までも告てのち猶理非分明あはばせん方あり  
といそれ彈正心中竊に驚き肺肝を針さるごとく  
覺えけしハ忽座を立ち木下を客位に請禮を

あゝ其愚よ〜道理ふ闇く一旦の勇をたれり〜  
 家國の安危存亡を知ぞ御邊の教よよきとてこれとめて  
 雲を披き〜青天と望〜とを得〜籠城の罪を  
 許されぬま〜神戸グ心中の所望と〜べ〜  
 神戸具盛ハ女の〜男子なる〜織田殿とハ同流の  
 平氏ふ〜は〜

織田關神戸〜新三位中將資盛の後あり  
 多くの公達のうち一所神戸へ入御は共御事かく  
 廣きにあ〜波木の義を程よく〜叶ぬひあは廣大  
 の仁恩ある〜と〜り藤吉郎心中よ大ふ  
 悦び殿の本意民と安ん〜國土の一日も〜や〜静

謚を〜むるを急とあさ〜へバ〜て見ぬまよかあふ  
 べくも存ぬ得共言上の後あ〜てハ答が〜然ぞ  
 まづ本陣は歸りその由と謀る〜として引返〜ける  
 時彈正〜め籠城の諸侍城門の際ま〜送り来〜  
 て禮とな〜けるさ〜今朝の〜事替〜たり木  
 下本陣は返り斯と言上あ〜は織田殿も悦  
 めせ〜ひと〜も計らよよる〜とゆるを  
 れる〜

三七信孝今年十一歳あると具盛の婿とあされ〜  
 藤吉郎あ〜び入城〜山路は對面〜殿の方ハ大  
 方よき容子あり神戸の心中決着〜てのちた〜ふ

中定むべし但御邊神戸へ行かば事調ふまじ  
とやく神戸ふ至り此事を調えあつて藏人ぬ信長  
の陣へ参らる様よ計らひぬふとやけるより  
山路大悦び某誠心より降参の志あり此城を  
御邊より預け申こととて城を木下より渡り彈正ハ五六騎  
を具して神戸へとてあそ出まされ

重修真書太閤記二編卷之二十一終

